

三 躰 山

(冠字番号 以 第 7 号)

成果 X=-206385.193m
Y=- 82928.413m
標高 1293.25m

世界測地系「測地成果 2011」

一等三角点シリーズ (三躰山編)

大和工営一等三角点の会

点	選 点	明治 28 年 6 月 18 日	選点者	館 潔彦
の	造 標	明治 一 年 一 月 一 日	—	—
記	埋 標	明治 31 年 8 月 9 日	埋標者	吉田林太郎
抜	観 測	平成 23 年 8 月 21 日	観測者	砂原真悟
粹	(備考) 平成 23 年 8 月、高度地域基準点測量			
	所在	山形県長井市大字寺泉字合地沢国有林 248 林班い小班		

登山日 2016 年 5 月 29 日 (日) コースタイム : 登り 5 時間 30 分、下り 5 時間。

山道のない三躰山への登頂路

果たして登れる山なのか??..

山形県の一等三角点 21 座の完登のためには、どうしても登頂しなければならない難関の山がある。山道のない三躰山である。三躰山は 2011 年に完成した長井ダムの北西約 7km にあるが、地形図は「山名」の記載はなく、1.8km 南にある 1256m 峰に「三体山」との表記がある。同じ発音だが、別の山である。

仮に「三躰山」に登頂したとしても、安全に元の場所に下山が出来るのか？それが最重要な問題である。



安全登山の確保ために..

登山ルートはどう設定する??..

「三躰山」の平成 8 年に作成された点の記では、歩道状況について「小径 (幅 0.6m) あり」そして「徒歩時間 4 時間」と記載されている。また「GPS 測量」による改測で作成された平成 23 年の点の記では「道なし」「徒歩時間約 300 分」との記載になっている。平成 8 年から現在の 20 年間に登山道はほとんど荒廃して藪になっていることは容易に想像できる。

しかし両方とも同じルートで登頂しているので、今回も点の記にあるルートで登ることにした。そして地形が緩やかな箇所は明瞭な尾根がある箇所を登頂ルートに設定した。登山口はヘアピンカーブの処が尾根筋に取り付くのに最適と考えた。

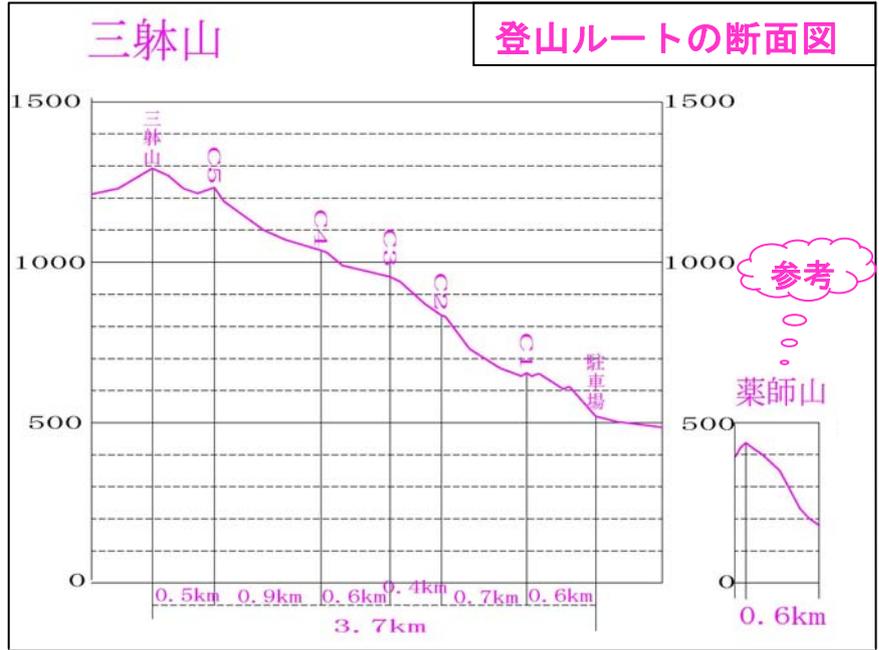


登山中の位置確認をどうする？

登山道があり、尾根筋の見晴らしがよければ、現在地は容易に確認できる。

しかし、藪の中では現在地の確認は難しくなる。そこで「ハンディGPS」を利用することにし、通過ポイントのデータを入力してC1からC5のポイントを辿り山頂を目指すことにした。

更に地形図から登山ルート^{たど}の断面図を作成し、気圧高度計を使用して位置確認に活用することにした。



安全安心のための下山対策

「山」は登りよりも、下りの方が大変である。まして登山道がない山なので、変な方向に迷い込んだら大変なことになる。そこで今回は下山を安全かつ安心して出来るように、目印のピンクテープを木々に巻き付けながら登ることにした。それに間隔も密に付けることにした。

登山時期の設定

登り5時間、下り4時間と想定しても秋は無理である。6月前後で日中の時間が長い時期に行く必要がある。今年の場合、長井ダムの奥で「西柘平トンネル」から先の県道の冬期閉鎖は5月17日で解除になった。そんなことで登山日は5月29日(日)に設定した。

当日のタイムスケジュール

当日は朝4時に新庄を出発し、登山口から7時に登山を開始し、12時の山頂着を目標とした。藪がどの位深いのか？それが問題である。



道なき山への、アタック!!?

「ながい百秋湖」・・・

当日の午前4時に会社を出発し、長井市に向かって車を走らす。長井市役所付近のコンビニで買い物をし、長井ダムを目指してすすむ。

長井ダムは「ながい百秋湖」と呼ばれ、2011年（平成23年）に完成している。長井ダムの建設に伴って県道には4つのトンネルができ、最後の「西栃平トンネル」を通過すると、1車線ギリギリの幅員に縮小する。



業務でも携わりました「長井ダム」・・・

ヘアピンカーブが入山地点!?!?・・・

対向車が来ないことを祈りながら、曲がりくねった道をノロノロと進む。もうすぐヘアピンカーブかな?と思った頃、道が大きく旋回する地点を通過した。登り切った処に広いスペースの駐車帯があったが、引き返しヘアピンカーブを過ぎた広い路肩に駐車した。時刻は6:25。7:00に登山予定で朝食をし、身支度を調える。



標高 525m
ヘアピンカーブの手前に駐車して・・・

先人の足跡さがして・・・

いよいよ登行開始。ヘアピンカーブの道路から、数メートルの落差の崖を小枝に掴まり枝尾根に上がる。尾根で藪の薄い処を選んで進む。椿の花が所々に咲いていた。また花かなア、と思って近づいて見ると、それはまだ新しい「ピンクテープ」の目印であった。紛れもなく、最近誰かが登った証拠である。

幸先さいききの良いスタートだ。私達はその「先人の足跡」を探しながら登ることにした。



朝日連峰

標高 800
ようやく眺望が効くようになってきて・・・



この先も「ヤブ」はつづくんで・・・



下山の為に、ピンクの目印を巻いて登る・・・

展望の効かない藪からの脱出・・・

標高 618m のピークで三休山へ続く尾根筋と合流した。そこには右手から左の上部の方に踏み跡が確認できた。目印の「残骸？」もある。

(変に安心?) 新たな目印を付けながら登る。

藪をかき分けながら登り、標高 800m 地点になると、木々の間から視界が効くようになった。標高 900m を越えると更に視界が広がる。未だ尾根沿いに残雪があり藪から雪渓に飛び出した。



標高 910m
目指す稜線も間近に見えてきた・・・



標高 930m
眼下に「木地山ダム」が現れる・・・



標高 990m
ヤブを避けて、雪渓を登る・・・



標高 1150m
尾根に戻ると 三休山が望める・・・



標高 1170m
長井市方面の市街地が広がる・・・

標高 1230m の前衛峰



1230 ピークへは、ガレ場の急登でした・・・

ガレ場にロープが張られている??

標高 1000m を越えると、広い尾根になった。前衛峰下のガレ場に近づいてくると瘠せ尾根に変化し、雪で押し付けられた灌木の中を「泳いで」ガレ場下に辿り着く。ここをガレ場端のたど小枝に掴まりながら登ると、途中からロープが張られてあった。誰かが残していったのだが、何度も登る「登山対象」の山なのだろうか??

Am11:15。1230m の前衛峰にようやく着いた。目指す山頂はもうすぐの筈だったが・・・。

主稜線は深い藪になっていて・・・

15分程休憩し、藪の尾根を歩き出した。雪に押された灌木を、足を高く上げて跨ぐ場面もあり、疲労が蓄積していく。山頂下の鞍部で「エネルギー」を補給し、斜面をななめに登ること40分。12:30に三躰山山頂に到着した。

深い藪が災いして、前衛峰から50分を費やしたことになる。登山道のない山への「山登り」。「平坦な道」ではないが、ようやく登頂できた。



「未踏の山？」三躰山山頂で寛ぐ・・・

未知の世界故に、慎重に準備した上での「初登頂？」だったので、その達成感もひとしおのものとなった。早速、昼食を摂りながら、眺望に目を凝らし、登ってきた道すがらを振り返っていた。登り5時間と想定し、実際には5時間30分費やしたが、充分満足のいく行程である。

「三躰山」は国土地理院発行の地図には山名の記載がない。一般には合地沢の源頭にあることから「合地峰」と呼ばれているという。

一等三角点の山で、これだけの景色が楽しめるので、「これぞ登山!!」と実感できるのに、一般の「登山対象の山」でないのを残念に思う。

再び、藪の中を下山する・・・

山頂には30分滞在して午後1:00に下山を開始した。6月の日中時間の長い時期なので心に余裕がある。しかし「藪の中」の下山である。目印のテープを付け忘れた山頂直下と前衛峰下で「道」から逸れてしまい、修正した。それでも5時間後には無事に入山口に到着出来た。



三躰山の登頂の意義・・・

大和工営一等三角点の会が、山形県の 21 の一等三角点の登頂をめざして活動をしているが、登山道のない山である「三躰山」に、初めてにして「初登頂」できたことは実に意義深いことだ。なぜ「初登頂」が出来たのか？その主なものを挙げれば「天候」「体力」「地図読解力」「時間的余裕」等があると思う。それらを総じて世間では「運が良い」ということになるらしい。（中之沢山は 2 回目の挑戦で登頂している。）

「運が良い」その明細書デス・・・

「天候」 5 月 29 日の天候は晴れで、近接の米沢市の気温は最低 10.5 度、最高 29.6 度を記録している。朝方は高気圧に覆われ「放射冷却現象」で冷え込み、涼しいうちに登山開始した。加えて無風状態で、登山開始 2 時間 30 分後には標高 1000m の圏域に入り込めた。

「体力」 「体力」とは肉体的に頑強な体をしていることではなく、「あきらめない気持ち」とどんなに疲れても「食欲旺盛」なことではないかと考えている。どんなに疲れても「モノが食べられる」ならば、消耗したエネルギーは^{たちま}忽ち回復する。今回の山行でも、おにぎり 1 個のエネルギーの凄さを実感した。登山には「食事の時間」は特にない。エネルギーが消耗したら「モノを食べる」こと。それが基本である。

「地図読解力」 いわゆる「地図を読む」ことは、そう難しくはないと思う。「方向音痴」でなければ、特に難しい事ではない。地図上で、自分が今何処にいるのか？、どの場所に行きたいのか？が理解出来れば、地図の読解には充分なこととなる。ただ、市街地の場合と山岳地の地図は大きく様変わりする。山岳地の地図は等高線だけになってしまう。自分の現在地を把握するのに工夫が必要になる。「断面図」と「気圧高度計」の利用も役に立つ。そして一番重要なのは、登山中に地図上での現在地と、現地の状況を把握して覚えておくことである。それは下山の時に、ここを通ったとか、こんな場所は通らなかった。というふうに役立ってくる。万が一「道が解らなくなった」時は、解る場所まで戻り、気を落ち着けてから行動すること。それでも解らなくなった時は動かないこと。

又、十分に充電した携帯電話を持参することはもちろんのことである。

「時間的余裕」 登山対象の山が決まったら、登山時間をそのパーティの力量に応じて設定し、遅くとも日没の 2 時間前には下山するように余裕をもった計画を立てることが肝要となる。「時間の余裕」がないと「気が焦り」思わぬ事態と遭遇するケースが多くなる。

「三躰山」を想う・・・

私達の目標のひとつ「三躰山」登頂は終わった。もし身近な人から「連れてって」と云われたら又登るかも知れない。詩人高村光太郎著『道程』の冒頭に「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」というのがあるが、最初「道」は何処にもない。「道」は何らかの目的を持って拓かれ「道」となる。今回の「道」のない山「三躰山」には登山の原点とも云える醍醐味が隠されているような気がしている。